みんなの大学校 2022 年度専門課程卒業論文

「障がい」という現実に対する「公共」の在り方について

－「不安」を引き起こす生きづらい社会構造の再検討に向けて－

みんなの大学校教養学部社会教養学科
水越真哉

2023 年 1 月 30 日

目次

はじめに 2

第 1 章　障がいと不安 3

第 1 節　個人の内面的な不安 3
第 2 節　個人の社会との不安 3
第 3 節　障がい者としての不安 4

第 2 章　不安とは何か 6

第 1 節　不安の定義 6
第 2 節　映画の中の不安『グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち』から 6
第 3 節　映画の中の不安『千と千尋の神隠し』から 8

第 3 章　社会における格差と分断 11

第 1 節　格差の現状を見る 11
第 2 節　教育格差と文化資本 13
第 3 節　格差から分断へ 14

第 4 章　社会構造の検討 17

第 1 節　組織の透明性と社会構造の変化 17
第 2 節　デジタル化が推し進める透明性 18
第 3 節　情報は誰のものか 20

第 5 章　これからの公共の提示 23

第 1 節　公共を考えるために 23
第 2 節　障がい者が社会で生きていくために 23

あとがき 26

引用文献 27

はじめに

私がものごころついたときから感じてきた「生きづらさ」と「不安」。それらが高じて今現在障がい者として生きている自分をまず、客観的に眺めていくことから本論文を展開していきたい。その個人から始まり、人が社会へと入っていくには何が必要なのか。個人の側、社会の側それぞれの現状と課題の解消を考える。

第 1 章では、幼い時より感じてきた「不安」は、一般的な不安なのだろうか。それとも生まれつきの資質、環境からくる私個人のものなのだろうか。

何故、不安を考えるのか。それは私が周りとは違うのではないか、周りとのなじめなさを考え、障がいが発症し持つ身となり、それらはより強くなってしまった。更に意識が向いてしまったのである。そして避けることが出来た不安なのだろうかとの問いを見つめる。

第 2 章では、不安をもう一度様々な方面から見直しまとめていきたい。用語として、生きづらさの原因としての面など、定義や社会的な意味を整理していく。

第 3 章は、格差が格差を生む現在の社会にあって、教育格差を題材にしながら原因を考える。

第 4 章、社会構造の視点から人権と平等を土台とし、社会に起こっている急速な情報化を意識して個人と社会の関係を問い直していく。

第 5 章、個人の自己実現、個人の幸せと共同体としての倫理を矛盾なく示すことを公共の考えを導入してその在り方についての検討を試みる。

これらを通じて、障がいと生きづらい世の中に共通する課題を浮き彫りにし、個人の幸せと共同体の倫理の双方を満たす新しい公共の提示をすることが出来るかを目指したい。

第１章　障がいと不安

第１節　個人の内面的な不安

私にとって、生きづらさの原因となってきた「不安」についてから始めたいと思う。私にとっての不安は常にあること、感じていることが当たり前であったため、その存在にすら気づいていないものも多かったように今思えば感じる。

まず、障がい者となる前から感じていた私の内面的な不安を述べたい。

それはとにかく、周りと違うのではないかという不安である。何かにつけて人と比べられてきたからではないかと思う。その比べられる頻度そのものが人より過度に多く感じられ、自分の欠点を指摘され、または心配され、自分というものに肯定感が持てなかったのである。

はじめ気になったのが身体について心配されることである。自分は身体が弱いのではないかであった。それだけでなく、ちょっとした癖もたびたび指摘され、自分では問題ないと思っていたものが、だんだんと自分は健常ではないのではと思っていくようになる。

その初めのピークとなったのは中学生の時である。小学生の頃から、当時自閉症と呼ばれるものは知っていて、そのような人が特別支援学級に通っている事を認識していた。それが中学に近づいたころから、通常学級の中にも自閉症傾向の人がいることに気がつき始める。更には、勉強ができる人にもその傾向がある場合があるとまで気がついていった。それが、私にとても当てはまるような、しかし当てはまらないような曖昧な判断のまま中学の時を過ごす。そのことを払拭しようと勉強に、部活動にとのめり込みかえって心身ともに疲れ果ててしまい支障をきたした。ついには高等学校中退にまで結びつくことになる。

ここで、私の障がいについて書いておきたい。高校を中退し、長いひきこもりとなり、30歳を目前にメンタルクリニックを受診となる。そして、しばらくは正式な病名はつかなかったが、初めについたのは「気分変調症」であった。この病気はやや軽いうつ状態が長期にわたって続くものである。その病名もやがて「反復性うつ病性障害」となる。気になっていた、昔で言うところの自閉症。今では呼び方が変わり自閉症スペクトラム障害をはじめとする発達障害についてであるが、私の主治医はよほどのことでなければその診断名は付けないとのことと、またそう簡単には無いとの診断も下さない医師であるため、あるとも無いとも言われておらず、病名は気にしないでこれからの将来を考えましょうとの考えである。今みんなの大学校に通いある程度病状が安定はしてきて、ようやく病名、障がい名について気にすることをしないようになることができ始めたところにさしかかっている。

ここまでが、周りと違うということに対する不安の私の遍歴である。

第２節　個人の社会との不安

もう一つ大きいのは、社会、つまりは人となじめていないのではないかという不安も強い。前節の人との違いから来ているものであるが、同じことをしているつもりでいても、感覚自体が違うのだから自分は浮いてしまっているのではないかとの不安がつきまとう。時々上手くいったと思ってもそのことさえ肯定できない。なぜなら自分は人と感覚が違ってしまっているからである。これがただの不安だけなのか、本当なのかは考えれば考えるほどに強まっていってしまう。

また逆に自分でも認識している考えの違いから、自分の方からなじみたくないと感じる社会の習慣もあった。その初めは幼稚園でのお遊戯である。そんな幼稚な踊りをさせられてなんで楽しそうにしているのかと。それでも浮いてしまわないように必死に感情を押し殺し踊ろうと努力はしていた記憶がある。また小学生に入ってからは低学年の頃、からかいなどに反発するとエスカレートするとの思いで、無視で対抗していたところ、ある日普通に話していたら「水越がしゃべった」と言われてしまう。この一言は私にとって大変ショックで、その後の人生に大きく影響することになる。これではいけないとその後からは、話したくもないのに無理をしてでも話そうとするようになったからである。不自然な会話の仕方であってでもである。しかし効果もあった。話を周りに合わせ、内容も合わせるために知識を集めているうちに、何となくであるが少しまわりとなじめているような感覚を味わえたのである。

これらのことは、私にとって功罪両面あったが常に意識して行動に移すため、おそらくは不自然さ、そして何にしても疲れていってしまった。その状態は、不安を助長していったのか、少しは回復に向かったのかさえ分からないままである。今、盛んに言われる自己肯定感が低い状態であったのだろうと思う。

第３節　障がい者としての不安

高等学校を中退し、長いひきこもりの期間に入ったわけであるが、先の人との違いの不安はあるものの、学業の成績、部活動での体力の増進をはかれた時期もあったことから体調、特に肉体的な意味での回復さえできれば社会への道はまだまだ開かれていると思っていた。しかし、病院にかかり診断名がついた後からは、障がい者としての不安が顔を出してくる。

まずはこの障がい、病状が苦しいのであるが果たしてよくなるのか、苦しさから解放されるのかという不安であった。

次に大きな精神状態を表す言葉として、「なぜ自分が」である。もう少し後に回復が始まってからであるが、「悲劇のヒーローになるなよ」という言葉を同じような精神の病の人が言われたことがあると聞いた。初めは正にそのような状態に陥った。これらのことは自分を保つことの難しさを初めて感じた瞬間であった。

障がい者と定義されてしまうという不安もある。障がい自体が苦しいということもある。

もちろん、そうでない場合もあるが、周囲との関係性において障がい者として接せられる不安、つらさも多分にあるということである。

例えば、優しさに対する不安というものがある。それは、ヘイトでない限り障がい者に対して障がい者と言わないように、優しく言葉を書けられた時、障がい等によって何か行動に直したほうが良いところや人に迷惑をかけているときに、そのことを言ってもらえていないのではないかということである。つまりは、過度に相手の言葉を言葉通りに受け取れなくなってしまう状態である。人間不信とは違い、相手を信用しているからこその不安であり、優しさが痛くなってしまう。優しくされる程に自分は障がいが重いのではないかと自信を無くしてしまう場合さえある。障がいという区分が生む、関係性の変化でもあった。

こう考えると、私とは「不安」が付きまとい、生活に影響を与えている事実は長年続いている状況である。

第２章　不安とは何か

第１節　不安の定義

不安について再度考えていきたい。

用語の定義として、『三省堂国語辞典第三版（中型版）』（編者：見坊豪紀主幹、1987）によると、「どうなるかと心配して、おちつかないようす。」とある。

『知っておきたい精神医学の基礎知識〔第 2 版〕－サイコロジストとメディカルスタッフのために』（編者：上島国利・上別府圭子・平島奈津子、2007）では、本文の欄外に、

> 不安と恐怖。不安も恐怖も感情の一種で、区別しないで用いられることも多いが、本来は漠然とした対象の無い恐れの感情のことを不安といい、ある特定の対象に対する不安のことを恐怖という。したがって、高所不安ではなく、高所恐怖が正しい。不安（恐怖）は通常、動悸、頻脈、息苦しさ、などの自立神経性身体症状を伴っている。

と記してある。不安の種類についても挙げていきたい。

まず、注目すべきは、三省堂国語辞典に「どうなるかと心配して」とあるように、未知のものに対する感情ということ。その未知のものとして考えられるのは、未来の不確実性からくる不安ではないだろうか。人は未来を予測しようとするものであり、それは完全には不可能なものである。そこからこの不安は生まれると考える。

次に社会の中での不安があるのではないだろうか。自分が置かれている立場ともいえる。立場からくる不安とは、どのように振舞うことを望まれているかを意識することにあり、人との関係性の問題となる。

私がここで挙げる最後の不安は、個人の内在する矛盾からくる不安である。何かしらの矛盾により迷いが生じ、自己が揺らぐことからくるのではなかろうか。

これら以外にも、細かく見ていけばまだまだ挙げることはできようが、ここではこの３つを主な不安の例としておく。

第２節　映画の中の不安『グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち』から

映画を題材に不安を考えていきたい。

取り上げるのは『グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち』（ガス・ヴァン・サント、1997、ミラマックス）である。

> 天才的な頭脳を持ちながらも幼い頃に負ったトラウマから逃れられない一人の青年

と、最愛の妻に先立たれて失意に喘ぐ心理学者との心の交流を描いたヒューマンドラマである。

1997 年 12 月のワールドプレミアでは当時は無名の俳優であったマット・デイモンが執筆した脚本の完成度の高さに注目が集まり、最終的にアカデミー賞やゴールデングローブ賞で脚本賞を受賞するなど高い評価を受けた作品である。

ストーリーは以下である。

フィールズ賞受賞者でマサチューセッツ工科大学数学科教授のジェラルド・ランボーは、数学科の学生たちに代数的グラフ理論の難問を出す。世界屈指の優秀な学生たちが悪戦苦闘する中、いとも簡単に正解を出す者が現れた。その人物は学生ではなく、大学でアルバイト清掃員として働く孤児の青年ウィル・ハンティングであった。

ランボーはウィルの非凡な才能に目をつけ、彼の才能を開花させようとするが、ウィルはケンカをしては鑑別所入りを繰り返す素行の悪い青年だった。ランボーはウィルを更生させるため様々な心理学者にウィルを診てもらうが、皆ウィルにいいようにあしらわれ、サジを投げ出す始末。ランボーは最後の手段として、学生時代の同級生ショーン・マグワイアにカウンセリングを依頼する。ショーンはバンカーヒル・コミュニティ・カレッジで教壇に立つ心理学の講師で、ランボーとは不仲であったが、ウィルの更生のため協力することになった。

ショーンは大学講師として表面的には健全な社会生活を送りながらも、最愛の妻を病気で亡くしたことから孤独に苛まれていた。事情を知らないウィルは当初ショーンをからかっていたが、やがて互いに深い心の傷を負っていることを知り、次第に打ち解けていく。さらにハーバード大学の女学生スカイラーとの恋を通して、ウィルは自分の将来を模索する人間へと徐々に成長していく。

出典

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia)』、「グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち」

（https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%B0/%E6%97%85%E7%AB%8B%E3%81%A1）（閲覧 2022 年 9 月 26 日）

この映画の中でウィルとショーンは最初のカウンセリングでぶつかる。次のカウンセリング、ショーンはウィルを公園に呼び出し、様々な実体験をしたことがあるかを問うていく場面がある。そしてこう語り掛ける。「君から学ぶことは何もない。本に書いてある。君自身の話なら喜んで聞こう。君って人間に興味があるのだから」。知識は大切だが、人間関係

においては自分をさらけ出すこと、自己の公開性が大切であるとこのセリフは意味しているように思う。

ウィルとスカイラーとの喧嘩では、スカイラーに「私を恐れているわ。私に愛されなくなることを。私も同じよ、正直に認めるわ。」と突きつけられる。さらに言い合いウィルは出ていく。この場面では恐れ、つまりは不安の原因を愛されなくなることとし人間関係の不安定さからくる未知の未来を描いている。またスカイラーの側は、その恐れを認めていることにも注目したい。恐れを乗り越え部分的にでも自己を開示しているのである。

最後に挙げる場面として、終盤に近づきショーンはウィルに魂に触れる本当の親友がいるのかと問う。回答に困りウィルは過去の偉人たちを挙げる。そんなやり取りを通してウィルにショーンは、「現実世界の君は、自分が傷つくことを恐れ、先に進もうとしない。」と言うのであった。ここでは直接的に描かれている。自分をさらけ出すことを怖がり、そして動けなくなっていると。

ここまで人間関係、その恐れ、更にはその結果として動けなくなってさえしまう自己開示に対する不安を挙げてきた。自己開示には、その行為が必ずしも受け入れられないという不安が付きまとう。人は自分を知ってほしいのか。それとも過去のトラウマ、苦手なもの、コンプレックスなどを隠しておきたいのか。もちろん両方であろう。この映画は、それでも人は開示をしていくことこそ、生きやすい充実した人生につながると言っていると解釈したい。

第 3 節　映画の中の不安『千と千尋の神隠し』から

次に宮崎駿の『千と千尋の神隠し』（2001、スタジオジブリ）から考えていきたい。

ストーリーは以下である。

> 千と千尋の神隠しは、主人公である荻野千尋が、両親を助けるために物語の舞台である油屋で働きながら成長していくお話です。千尋と両親は、引越しのため車にたくさんの荷物を乗せ新居に向かっているところからスタートします。千尋は、仲が良かった友人と離れ離れになって転校することに現在も不服の様子です。
>
> 道中、運転していた千尋の父親は道に迷ってしまいます。その途中、千尋は不思議な銅像のようなものを見つけるのでした。しばらく進むと道は行き止まりになっており、それ以上先は徒歩でトンネルをくぐる必要がありました。
>
> 母親や千尋は道を戻って早く行こうと促しますが、父親は興味本位で先に進むことにします。トンネルを抜けると、廃墟のような建物が点在しており、美味しそうな食べ物の匂いがしてきます。匂いに誘われ進んでいくと、飲食店が軒を連ねているものの、人が誰もいません。

しかし、引き止める千尋をよそに、両親は後でお金を払えば問題ないからと勝手に食べ始めてしまうのでした。両親はご馳走を目の前にして食べるのに夢中の様子で、千尋は見ず知らずの場所に来てしまったことに困りながら散策します。すると、千尋の目の前に一際大きな建物が現れ、「油屋」と書かれています。

そのとき、突然現れた少年に「川の向こうへ走れ」と言われ急いで両親の元へ戻ります。しかし、飲食店で食事をしていたはずの両親は巨大な豚へと変貌していたのでした。混乱する千尋でしたが、徐々に建物の明かりが灯り始めます。

すると、不思議で怪しい見たこともない生き物が集まり始めます。川のほとりで怯えていると、先ほどの少年が姿を現し、この世界のことや人間が生きるための厳しい掟を教えてくれます。

この世界では人間が嫌われており、生きるためには油屋で働くしかなかったのです。そして千尋は両親を助けるべく、ハクという少年に言われるがまま油屋で働き始めるのでした。

出典

「千と千尋の神隠し」に隠された謎とメッセージを徹底考察

（https://dream.jp/entmeet/article/615faaa92fd07408342a15f6/）

千尋は、湯屋の主人であり魔女の湯婆婆と会い、働かせてもらえるよう頼む。湯婆婆はそれを承諾するが、「荻野千尋」という名は贅沢だからと、「千」に名前を変えられてしまう。

この物語の中では名前がアイデンティティの象徴として重要な意味を持つ。湯婆婆は相手の名前を奪い、支配していた。物語最後では千尋は名前を取り戻すこととなる。

私はこの物語の中に登場する「カオナシ」に強く興味をひかれた。カオナシは初め橋の上で、ただ人を眺めている客でも使用人でもなく、言葉も話さない存在として描かれている。そのカオナシが千尋に興味を持ち出し、関わりを持とうとする中で事件が起きていく。物語の中でカオナシは、使用人を食らって言葉を話すことを手に入れ、千尋の気を引く為に偽物の金をばら撒き、次第に狂暴になっていく。そこに、この映画を見たものに不気味さを感じさせる異色な存在感を放っている。

しかしその中にも、私はカオナシに自分を重ねるものがあったのである。自分というものが希薄ながらも人の言葉を取り込むことによって自分を表現する。本来自分の力ではないものに頼って周りとの接点を持つなどにである。更には私の資質や障がいとも重なるような気がしてならない部分もあった。

カウンセリングサービスを行う合同会社リソースポートが運営するホームページ「子育てカウンセリング　リソースポート」は「『カオナシ』について考える 3」の中で、以下を指摘している。

カオナシの抱える問題は、実は、現代に生きる全ての人に共通する問題だと考えられ

ます。私たち自身も、職業生活・家庭生活など様々な場で、「自分らしく」生きられないという困難を抱えています。これは、一つのアイデンティティクライシスだと言えます。また、人との関わり合いの中でも、一緒に活動する関係（ともに眺める関係）を保つことができず、否定的な感情をぶつけ合う関係（見つめ合う関係）に陥りがちです。

自分らしくというアイデンティティを保つことの難しさは、周りとの関係性の調整の問題である。

つまり、カオナシの姿は、現代に生きる私たち自身の直面する問題を、いびつなまでに大きく誇張して表現されていると考えることができます。しかし、物語の終盤では、そのカオナシも、何とかより良く生きていけるかもしれないという希望が描かれています。

自分らしく生きるためには、自己のコントロールだけの問題ではなく、環境の影響が大きく作用しているということでもある。千と千尋の神隠しの中のカオナシは、周りに翻弄されていたとも言えるのではなかろうか。物語終盤、湯屋を離れることにより居場所を見つけたカオナシは穏やかに過ごしていけそうな環境に出会っている。

それでも私はカオナシに、自分のアイデンティティクライシスや障がいを重ね合わせ、自分というものを見、受け入れることができない部分が残る。現実が生きにくく、その原因を自分に求めるべきか、環境に依存していると考えてよいのか、判断がつかない。カオナシと同じように、今の環境で自己実現をしようとするとき、周りに、社会に迷惑をかけてしまうのではないかとの不安がある。カオナシが客でも使用人でもないように、私自身も社会の一員として認められていない不安が付きまとうのである。

「子育てカウンセリング　リソースポート」映画・アニメから学ぶ（2018）、「カオナシ」について考える３（https://www.resource-port.net/2018/04/13/%E3%82%AB%E3%82%AA%E3%83%8A%E3%82%B7-%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B-%EF%BC%93/）

第３章　社会における格差と分断

第１節　格差の現状を見る

ここからは不安や不満の原因としての社会問題である格差に目を向けたい。

内閣府「選択する未来　－人口推計から見えてくる未来像－　－『選択する未来』委員会報告　解説・資料集－」、「第３章　第２節　経済をめぐる現状と課題」による、ジニ係数から見た格差についての現状を取り上げることから始める。

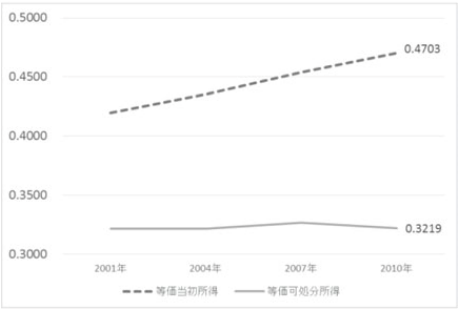
格差の現状

格差を測る指標の一つに「ジニ係数」がある。これは、所得の分布について、完全に平等に分配されている場合と比べて、どれだけ偏っているかを、0 から 1 までの数値で表したものである。仮に完全に平等な状態であれば、ジニ係数は 0 となり、1 に近くなるほど不平等度が大きくなる。

ジニ係数についての説明は以上となっている。ジニ係数は所得格差を示すときによく使われる指標であり、格差について論じる入り口としては妥当であろう。

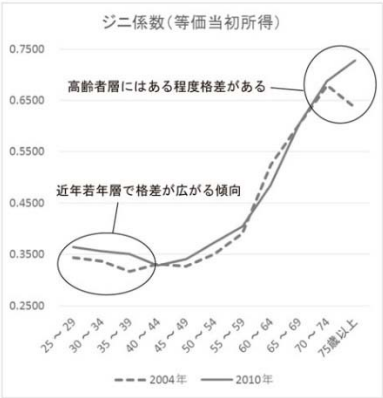
その数値を＜図表 3-2-14-1　ジニ係数の推移＞、＜図表 3-2-14-2　年齢階層別ジニ係数の変化＞の総務省の分析として次のように語っている。

＜図表 3-2-14-1　ジニ係数の推移＞



（備考）厚生労働省「所得再分配調査」

＜図表 3-2-14-2　年齢階層別ジニ係数の変化＞



（注）等価可処分所得でのジニ係数を見ると、各種所得再分配の効果によって、各年齢層においてジニ係数は低下（格差が縮小）する。

（備考）厚生労働省「所得再分配調査」

近年、人口構成の高齢化、単身世帯化が進む中で、ジニ係数で見ると緩やかに格差が拡大してきている。これは、高齢者の所得には人生を通じて働いて積み重ねてきた結果が反映されるため、もともとジニ係数が大きくなるところ、高齢者の比率が高まると全体のジニ係数が高まることになるという理由と、若年層において近年正規・非正規労働の分化などが生じているために格差が広がる傾向にあることが主な理由である。

この資料から読み取れるものとして、近年 2001 年から 2010 年にかけてジニ係数で見ると、緩やかに格差が拡大してきているとある。何をもって緩やかなのかは記されていない。しかし、格差が拡大していることは間違いないようである。

そして、社会保障制度など再分配についても記されている。

> ただし、社会保障制度などを通じた再分配後のジニ係数はほぼ横ばいとなっており、社会保障制度などが再分配機能を発揮していることがわかる。
>
> 高齢化の進展を和らげる人口問題への取組、若年層の貧困問題の適切な対応、社会保障制度の持続可能性の確保など、格差の問題は、重要な経済・社会政策の真価が問われる重要な問題である。

社会保障制度などを通じた再分配後のジニ係数はほぼ横ばいとなっているとしている。こちらの再分配後の格差への見解も、近年いたるところで言われているものと違いがあるようにも思われるが、確かに数値的にはこの期間の格差を和らげた効果はあるのだろう。

続いて、経済成長と格差の相関関係について次のように言及している部分に移る。

> 成長と格差
>
> 経済成長と格差の関係については、市場原理の下で経済成長すると、勝者と敗者に分かれるために、格差を拡大させるという面と、一方で、経済成長が停滞すれば再分配に充てられる果実が生まれないため、それに伴い格差が固定化するという面がある。

そもそも、市場原理の下で経済成長すると勝者と敗者に分かれるとある。そして、経済成長が停滞すれば再分配に充てられる分がないというジレンマを抱えていることから書き出されている。格差の固定化という言葉まで使われている。

> また、所得格差が拡大すると、経済成長が低下する、という方向性での分析がある。近年、多くの先進諸国では、過去 30 年で富裕層と貧困層の格差が最大となる一方、中長期的な成長率が低下しているとされる。成長のエンジンは人的資本であり、格差の存在、程度が人的資本の蓄積に悪影響を及ぼさないことが重要である。

ここからの所得格差と経済成長の関係の分析だと、いわゆる負のスパイラルに陥ろうとしている、あるいはすでに陥っている可能性すらある。それらは、市場原理に任せておける段階を越えたとも取れる記述ともなっている。人的資本への悪影響の示唆とさらなる経済成長への悪影響が心配されている。

提言としてこの部分の最後で訴えられていることがある。

また、経済成長の果実の分配は、市場原理に委ねても相応に進むという考え方がある。経済にはそういう面もあると考えられるが、人口急減・超高齢化へ向かっている日本の状況に照らせば、前述のとおり、社会保障制度などによる再分配をきちんと行いながら、人口問題や若者層の貧困問題へ適切に対応していくことが重要である。

いま日本で起こっていることに対応するには、市場原理を過信せず再分配を適切に行い格差、貧困問題に対応することとしている。

出典
内閣府、『選択する未来　－人口推計から見えてくる未来像－　－「選択する未来」委員会報告　解説・資料集－』、「第 3 章　第 2 節　経済をめぐる現状と課題」
（https://www5.cao.go.jp/keizai-shimon/kaigi/special/future/sentaku/s3_2_14.html）
（閲覧 2022/10/29）

第 2 節　教育格差と文化資本

第 1 節の資料でも触れられている人的資本の大切さに関係する「教育」についてみていきたいと思う。格差の固定化も叫ばれている現在には、次の言葉が当てはまるのではないか。

『機会不平等』（斎藤貴男、2016）では、著書の中で、「機会とは与えられ測定されるものではなく、その結果を問わず、ただ万人に開かれていなければならないものだ」と書かれ訴えている。

その機会の不平等、格差の入り口となる教育格差を考えると、学校教育に入る前から文化資本の差という形ですでに格差が始まっていると考えている。そのことは、『教育格差―階層・地域・学歴』（松岡亮二、2019）の文化資本について記されている次の部分から始めたい。

これには 3 つの形態が存在する（Bourdieu 1977a、1977b、1984、1986）。具体的には、本や美術品などの物財を示す「客体化された文化資本」、学歴資格など制度に承認された「制度化された文化資本」、そして、言語力、知識、教養など簡単に相続されない「身体化された文化資本」である。これらの文化資本は、主に家庭において時間をかけて親から子へと相続される。そして、学校教育の中で評価される文化資本を持つ子は、高い成績や教師から好意的な評価を受け、結果として家庭の文化資本の差によって教育達成格差が生じる。

文化資本の継承は、主に家庭において時間をかけて親から子へと相続されるとあり、つまりは格差の固定化が起こっているということである。公教育に入る前から起こるこれらの格差は、その後の教育達成格差にまでつながり、機会の不平等となるのである。そしてこう続く。

> このブルデューの文化的再生産論を基盤とする実証研究は数多い。海外では、読書習慣・環境、博物館訪問や観劇、文化的授業、課外活動、親子間の文化についての会話、文化や文学への態度、家庭の教育的資源などが指標化され、研究によって結果に差はあるが、基本的には家庭によって文化資本総量に差があり、文化資本と学力などの教育成果は関係している（DiMaggio 1982; Jaeger 2011; Lareau and Weininger 2003 など）。

この文化資本の継承による格差は、経済面の格差と深くつながっている。しかし、深刻なのは経済面が直に影響する「客体化された文化資本」だけにとどまらず、親の社会的地位である「制度化された文化資本」、教養など文化とも呼べる「身体化された文化資本」のほうではなかろうか。これらは、個人の人間形成に及ぼす深さでは影響を増すからである。

第 3 節　格差から分断へ

格差が進み更には、分断という言葉さえ使われるようになってきている。何において分断が起きているのか。

『リベラルとは何か　17 世紀の自由主義から現代日本まで』（田中拓道、2020）のはじめにの中で格差を抑えるためにはどうするかの議論で、リベラルの立場からこう考えるとしている。

> 現代のリベラルのもっとも大きな特徴は、市場と国家のバランスをとる必要があると考えることである。市場の自由や経済的自由は重要だが、行きすぎた市場の自由は社会の中に格差を生み出し、一握りの個人や集団に富を集中させ、他の人々の自由を脅かす。すべての個人に自由に生きる機会を保障するためには、国家が行きすぎた格差を抑制し、一定の再分配を行うべきだと考えるのである。

市場や経済的自由と個人の自由には対立する部分があり、すべての個人の自由を守るには国家が介入し再分配を行うべきとの理念だ。

その理念を実行するために培われてきたものが崩れつつあると続けている。

> しかし、こうした立場は今日さまざまな形で挑戦を受けている。一つの挑戦は、グロ

ーバル化に由来するものである。国境を越えた経済的なつながりが深まるにつれて、「新自由主義」と呼ばれる考え方が広がってきた。この考え方によれば、国家が弱い立場の人を保護したり、格差を抑制したりすると、経済的な効率性が損なわれ、社会全体が貧しくなってしまう。国家間のグローバルな競争にも後れをとってしまう。むしろ保護を最小限にして、人びとに自助努力を促すべきだとされる。

国家の介入を最小限にして経済の効率を優先するという考え方に立ち、弱い人の保護や格差の抑制について行わないことが望ましいという方向に進んできたとしている。

もう一つの挑戦は、情報通信技術やインターネットの発達等による、産業構造の変化に由来するものである。これらの変化は「ポスト工業化」とも呼ばれる。アマゾンやグーグルなど新興のハイテク企業が世界中に進出し、人びとの生活や働き方が大きく変わろうとしている。人びとはますます便利な生活を享受する一方で、先進国では安定した職、長時間働ける職が少なくなり、不安定な労働、短時間の断片的な労働が広がっている。不安定な立場に置かれた人びとは、自由よりも保護を、開かれた世界よりも閉じた共同体を求めがちになる。

一部の人を除き、不安定な立場へと追いやられているのである。そして自由と保護、開かれた世界と閉じた共同体へとの分断が起きている。

どの国でも、新しい技術の恩恵を受け、より自由な機会を手にする人びとと、そうした恩恵を受けられず、かつての安定した暮らしが失われつつあると考える人びとの間で、分断や亀裂が広がっている。

として格差、その結果としての分断の原因や人々の心理的な要因を主に「グローバル化」と「情報化」としている。

また、『機会不平等』（斎藤貴男、2016）では次のように綴っている。

今日の“機会不平等主義者”たちも、何らかのレトリックをもって自らの欲望を正当化している。それは「グローバリズム」であったり、“世界市場の中での競争”という言葉であったりする。そうしたレトリックにより、持てる立場の彼らが“さらに得をする”ルール変更がさも公のためになされたかのような装いを得ることができる。

斎藤も不平等へ向かう原因として「グローバリズム」を挙げているが、ここでは「ルール変更」というものが起こっているとするところに注目したい。

「グローバル化」も「情報化」もある意味では境界線を無くす方向に働くようにも見える。

これらの境界線を無くすことにより別の境界線が浮かび上がってきていることにも注意を向けるべきである。

第 4 章　社会構造の検討

第 1 節　組織の透明性と社会構造の変化

情報化が進むことによって社会、個人にどのような変化が起ころうとしているのだろうか。情報化により情報の集中が起こり誰に力が集中し、誰から力を奪うのであろうか。近年、監視社会ともいわれている。それと同時に、組織の情報公開も進みつつある。どちらも情報化による社会の変化であるが、個人やそれらが形作る組織、社会は生きやすい方向に向いているのか見ていきたい。

「透明化が社会に強いる進化」（Daniel C.Dennett/Deb Roy、2015）『別冊日経サイエンス 249 科学がとらえた格差と分断　持続可能な社会への処方箋』（2021）の次の部分から見ていく。

> 過去にもコミュニケーション技術の進歩が世界を何度も変えてきたものの（文字の発明は先史時代を終わらせ、印刷技術は主な社会制度すべてに影響を及ぼした）、デジタル技術のインパクトは他のいずれをもしのぐ可能性がある。デジタル技術は一部の個人と組織の力を強める一方で別の個人・組織の力をくじき、1 世代前にはほとんど想像できなかった好機とリスクの両方を生み出すだろう。
>
> インターネットはソーシャルメディアを通じて、世界規模のコミュニケーションツールを個人の手に与えた。途方もないフロンティアが突如として開けた。ユーチューブやフェイスブック、ツイッター、Tumblr、インスタグラム、WhatsApp、Snapchat などが電話やテレビに匹敵するニューメディアとなり、それらの出現スピードはまさに破壊的だ。電話やテレビを開発してネットワークを構築するには何十年もかかり、組織は変化に適応する時間があった。これに対し現在のソーシャルメディアは数週間で開発でき、ものの数カ月で何億人もがそれを利用できるようになる。この猛烈な革新スピードのため、組織はメディアに適応する時間がなく、そうしている間に次の新たなメディアが登場する。

コミュニケーション技術の革新スピードが猛烈なため適応する時間がないと組織について語っているが、個人、特に障がい者にはどのような影響があるのだろうか。障がい者にとってフロンティアが開ける種類の技術に関しては歓迎する。一方で変化自体を苦手とする障がいもある。ようやく適応に近づいたとしても次の適応に迫られることは、その障がい者にとって終わりのない社会との関係のずれの原因となりえる。

> このメディアの洪水が私たちの世界に引き起こす大変化は「情報の透明化」という一語に集約できる。私たちはいまや、以前よりも遠くまでをより早く、より安く、より簡

単に見ることができ、同時に他者から見られるようになった。あなたも私も、自分が見ているものを他の誰もが見られることを知っている。これは相互知識の鏡張り反響室にいるようなもので、善し悪しだ。地球上の生物すべてを形づくってきた昔ながらの“かくれんぼゲーム”の舞台と装置、ルールが急に変わった。これに合わせられないプレイヤーは生き残れまい。

組織と制度に与えるインパクトは甚大だろう。これまで政府や軍、教会、大学、銀行、企業などはすべて、認識論的にあまり見通しの利かない環境において栄えるように進化してきた。ほとんどの知識が局所的で、秘密が容易に保たれ、各個人が盲目とはいわないものの近視眼的だった環境だ。

この、大変化は「情報の透明化」という一語に集約できるとし、舞台と装置、ルールが急に変わったとことを組織、個人が認識しなければならないと指摘する。まず、認識をしなければならないのである。そして、適応は生き残りをかけたものとなる。私自身、この大変化に適応し生き残ることができるのかは「不安」をさらに強め、障がいや病状を維持することさえ難しい。続けてこうある。

ところがそうした組織が突如として白日の下にさらされ、従来の方法にはもはや頼れないことに気づいた。新たな透明性に対応する必要があり、それができなければ絶滅するしかない。細胞が外界の環境変化から身を守るために効果的な細胞膜を必要とするように、人間社会の組織も内部の営みと公の世界との間に防護的なインターフェースが必要だが、旧来のインターフェースはその有効性を失いつつある。

「防護的なインターフェース」という言葉を用いて、組織には必要と説いているが、私は個人においても同じであると考えている。個人においては「むき出しの個人」が社会において生きていくには「防護的なインターフェース」が必要であるということである。急速な「情報の透明化」の中にあって組織も個人も自己を守らなければならないのは同じである。つまり、情報があふれる中にあっては「防護的なインターフェース」というものを意識していなければ自己を保てない。

第 2 節　デジタル化が推し進める透明性

では、デジタル化は何の透明性を推し進めるのか。組織の弱体化に寄与するのか、個人のプライバシーが無くなるという方向に寄与するのかである。どちらにしても、情報化の進歩は、すべてを白日の下にさらすことになるのか。誰が守られ、誰が守られないのか。「透明化が社会に強いる進化」（Daniel C.Dennett/Deb Roy、2015）『別冊日経サイエンス 249 科

学がとらえた格差と分断　持続可能な社会への処方箋』（2021）の最後にこのようにある部分から見えるものを探る。

> 米国では最近、利益と社会的目的の双方を達成する事業の必要性が認識され、企業体に関して「B Corp」（ベネフィット・コーポレーション、共益企業）という新たな区分が生まれた。グーグルとフェイスブックは創業者に異例の強力な議決権を与えることに定め、従来の慣行を断った。株式を公開していながらオーナー企業のような経営が可能になり、創業者たちは四半期ごとの収益に注目するウォール街の圧力をあまり気にせずに自分の長期計画に基づいて会社の舵を取れる。
>
> 「アラブの春」における組織化された抗議活動はソーシャルメディアが可能にしたもので、その規模とスピードにおいて比類がなかったが、これも新種の社会組織（短命の）といえるだろう。今後どうなるかは時が語ってくれるだろうが、組織の進化系統樹が急激な枝分かれを起こす間際に私たちはいるのかもしれない。

今までとは違う新たな組織形態が誕生し、社会がいっそう複雑化していく間際にある可能性について言及している。複雑さが増すということは、未来の予測可能性がさらに難しくなることも意味している。人々は将来への不安をいっそう募らせるのではないか。

> 透明化が組織を形作るスピードは、その組織が位置しているニッチ（生態的地位）の競争環境による。商品を提供する会社は、顧客が他社製品に容易に切り替えられるため、パブリックオピニオンの影響に最も強くさらされている。放っておくと、数十年かけて築き上げたブランドが数カ月で崩れてしまいかねない。
>
> 教会とプロスポーツリーグは、文化に深く根差した習慣に加え信心深い教徒やファンのネットワークがあるおかげで、企業よりはいくぶん保護されている。だがキリスト教会の児童虐待やプロフットボール選手の頭部損傷など、インターネット時代の前から秘かに続いてきた問題が相互透明性のもとで多くの人の目にさらされると、いかに強力な教会やスポーツリーグであっても適応か死を迫られる。

変化のスピードの影響は組織の種類や社会での位置によるとしている。個人と組織の関係性にその影響の度合いの因果関係を求めている。それでも、スピードの差こそあれ適応しなければ生き残ることはできないとし、組織がもともと抱えていた問題が浮かび上がるのである。

> この進化的システムから最も守られているのは、政府のシステムだ。抗議の声がソーシャルメディアで勢いを得ると支配者や与党を転覆させることも可能だが、国家の基本的な組織は政権交代の影響をあまり受けずに存続する傾向が強い。国家機構は競争

圧力にほとんどさらされておらず、したがって進化が最も遅い。

国家、政府は最も進化が遅いとしている。それは競争圧力にさらされていないからだとされる。振り返って日本も例に漏れないところがある。国家のシステムという点では、戦後は特に変化の圧力がない状態である。逆に個人は近年グローバル化の名のもとに競争圧力に強くさらされ変化せざるを得ないのである。

だがそれでも、かなりの変化を予想すべきだろう。組織を監視する個人・第三者の力は今後も強まる一方だと考えられるからだ。そうした圧力のもと、政府はその内部活動で生み出した膨大な生データを公開しつつある。大規模パターン解析とデータ可視化、データに立脚したプロジャーナリズムと市民ジャーナリズムの進展もあって、組織の透明化を加速する強力な社会的フィードバックループが生まれつつある。

いままさに生まれつつあるこの新たな秩序には、自己制限的な側面がある。アリのコロニーが個々のアリでは不可能なことを実行しているのと同様、人間社会の組織は個人の能力を超えて、超人的な記憶と信条、計画、行動、そしておそらくは超人的な価値までをも生み出す可能性がある。しかし私たち人間の進化は、善かれ悪しかれ、超人的組織を個人個人の規範に整合したものにとどめて抑制するように方向づけられている。この自己制限的なメカニズムは人間と機械のコミュニケーション能力の加速によって可能になったものであり、言語がそうであるように、人間という生物種だけに見られる特徴である。

組織の透明化を加速する強力な社会的フィードバックループが生まれつつあるという部分に注目すべきである。近年、監視社会と言われ、組織が個人の情報を集めプライバシー等の権利を奪うことが懸念されている。しかしここでは、市民の側も組織の透明化を進める動きがあることは興味深い。もはや組織も個人もこの点では一致して新たなルールの下で活動しなくてはならないとしているのである。

第３節　情報は誰のものか

「情報の透明化」に焦点を当ててきたが、それほど重要な情報とはどのように扱われるべきか。その理念や活用の好例として「図書館」があるように思う。日本図書館協会のホームページにある、「図書館について」及び「ユネスコ公共図書館宣言　１９９４年」から情報とはだれのものか考えてみたい。

日本図書館協会「図書館について」(https://www.jla.or.jp/library/tabid/69/Default.aspx)

（閲覧 2022/10/29）

図書館とは…

図書館とは、日本の「図書館法」によれば、「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」とされています。

図書館を支える理念

図書館は、それを生み出す社会の特徴や条件を色濃く反映してきました。戦時下では国家の思想を広める役割を果たすこともありましたし、一方では社会的マイノリティーの権利を守るために働くこともありました。社会の変化の中で、図書館はさまざまな状況におかれてきましたが、いくつもの波にもまれながら、いかなる状況の下でも、すべての人たちに情報を提供するのが「図書館の自由」（Intellectual freedom of libraries）なのだという理念を獲得するに至ります。アメリカでは「図書館の権利宣言」（Library bill of rights、1948 年採択）、日本では「図書館の自由に関する宣言」（1954 年採択）です。これはあらゆる種類の図書館が守るべき自律的規範として、広く支持を得てきました。また、この原則を守るための専門職の行動規範として、「図書館員の倫理綱領」（Code of ethics for librarians）があります。

日本図書館協会「ユネスコ公共図書館宣言　１９９４年」
（https://www.jla.or.jp/ibrary/gudeline/tabid/237/Default.aspx）（閲覧 2022/10/29）

ＵＮＥＳＣＯ　Ｐｕｂｌｉｃ　Ｌｉｂｒａｒｙ　Ｍａｎｉｆｅｓｔｏ　１９９４
１９９４年１１月採択　　原文は英語

社会と個人の自由、繁栄および発展は人間にとっての基本的価値である。このことは、十分に情報を得ている市民が、その民主的権利を行使し、社会において積極的な役割を果たす能力によって、はじめて達成される。建設的に参加して民主主義を発展させることは、十分な教育が受けられ、知識、思想、文化および情報に自由かつ無制限に接し得ることにかかっている。

地域において知識を得る窓口である公共図書館は、個人および社会集団の生涯学習、独自の意思決定および文化的発展のための基本的条件を提供する。

この宣言は、公共図書館が教育、文化、情報の活力であり、男女の心の中に平和と精神的な幸福を育成するための必須の機関である、というユネスコの信念を表明するものである。

したがって、ユネスコは国および地方の政府が公共図書館の発展を支援し、かつ積極的に関与することを奨励する。

図書館は自立した個人の醸成に始まり文化の発展、社会の繁栄へと寄与するということである。自由、民主的社会への貢献がうたわれている。それほどまでに、情報の公開、透明性とは重要である証でもある。このような理念を基盤としているため、現在では経済活動が商業的理由から図書館と対立する状態の場合さえある。デジタルの利点の一つに複製の容易さがある。商業的立場からすれば、自身でコントロールしたいものであろう。しかし、図書館の理念とデジタル化が組み合わさった時には、情報の所有の民主化が起こるのではないか。

情報の基本的人権を支える文化としての側面と、情報の娯楽的なものとしての側面は境界が曖昧である。文化資本は人格形成において重要な役割を果たすが、たとえ娯楽的な要素の強いメディアであっても有形無形の形で人の成長に影響するという意味では格差につながる。資本主義は人の格差を生むものである。その中にあって書籍に関してだが、図書館の理念が果たしてきた文化の民主化に対する役割は大きい。

そのように考えたとき、情報の透明化は民主的社会を構成する個人の醸成への新しい源となりえる。

第 5 章　これからの公共の提示

第 1 節　公共を考えるために

『三省堂国語辞典第三版（中型版)』によると「公共」とは「社会一般。公衆。」と説明されている。それは私たちが生きているこの場所のことであり、社会のことでもある。そこから一歩進んで公共の在り方を考えるために、私の 2 年前の論文「社会との接点へ向けて－障がい者からの発信－」（水越真哉、2021）から考え方を示す。

その論文の中で公共哲学を扱うにあたり、『公共哲学とは何か』（山脇直司、2004）から「公共」を考えていく土台を提供させてもらった。山脇は、社会をこれまでの「公私二元論」から、「政府の公、民の公共、私的領域」への転換を訴えている。この中の「公私二元論」は政治や司法、国家などを「公」、それ以外の領域、個人の幸福追求や家庭はもとより経済や宗教も「私」の領域とみなしている。そこから個人が社会と向き合う時に新たに「公共」を個人の尊厳が守られ、軍や政治や市場に押しつぶされずに暮らせる場のコミュニティとして提案している。「自己と他者のコミュニケーション」という視点で考えていき、公共性は、他者とのコミュニケーションのなかで個人の自己実現や尊厳が発揮されることであるととらえる考え方である。

この「公共」の概念を基盤とし、障がいを持つ者が突き当たる現実と、生きやすい社会とはどのようなものかを考えていきたい。中でも自己実現と尊厳についてどのように守られるべきかに重点を置き進めていく。

第 2 節　障がい者が社会で生きていくために

前述のとおりこの社会は情報化によって便利になり、ポジティブな考え方をすれば情報の透明化が今までの社会にあった障壁を壊すことで、新しい可能性を生むこともある。

例えば、物理的な距離を縮め、コミュニケーションの活発化を促し、新しい出会い、つながりを生み出すことになった。遠隔における会議では、顔と名前という個人情報を動画とともに公開をし、つながりを実現することにおいては、自分の透明化とも考えられる。

一方で急速な情報化により、その情報化に乗り遅れるもしくは取り残される方々の出現が、情報格差という社会課題を生み出すことになった。これはあらゆる格差にもつながる問題であるが、これは第三章で検証した。

透明化については、可能性を広げたと同時に、自分を開示する中で「障がい」等、いまだに社会でネガティブに取られそうな情報も公にさらされる可能性があり、私にとっては大きな不安材料である。この不安。変化の急速化により適応を迫られる中での「不安」とどのように向き合い生きていけばよいのだろうか。

『加速する社会　近代における時間構造の変容』（ハルトムート・ローザ、2022）では、

> 各人固有のアイデンティティは、人生が進むにつれて形成されていく。もしもアイデンティティは安定したものだというイメージがあるならば、それは社会制度に対する信頼性の高さを物語っている。

社会の安定度とアイデンティティの関係に言及している。社会が安定し急激な変化がないならば、アイデンティティも急激な変化にさらされないということである。続けて、

> 〈古典的近代〉のアイデンティティは、いわばアポステリオリだが安定したアイデンティティとして現象する。近代的個人はアイデンティティを自ら形成する使命を帯びているが、この使命は次のように表現される。現世における汝自らの場所を見出せ。職を選び、家族を作り、所属する宗教共同体を定め、政治的志向を固めよ、と。

近代的個人は、自らアイデンティティを形成していかなければならないが、何か型におさまるように求められており、それに向かって収束していくのである。さらにローザは指摘する。

> もっとも、古典的近代の構想にあっては、こうしたアイデンティティ形成は一度きりのプロセスであった。

と示す。つまり私は、現代においてはアイデンティティの形成は一度きりではなく、生涯続くものとして考える。

私が抱える不安や障がいは、このアイデンティティの一部と考えた場合、「不安」とは打ち消すものではなく、いかに共存していくのかにかかっている。障がいを持っていても自己実現へと向かい、尊厳ある生き方をするためには、この急速な情報化の中では障がい者といえども適応を迫られている。アイデンティティの形成とともに考えれば、現実を見据えるとともに、自分なりの夢、自分が耐えられるという気持ちを作り出す力を醸成していくことになろう。

そのために、経済的な成功と自己実現とを切り離し、内面の成熟度合に重きを置き、社会

や人とのコミュニケーションに価値を見いだすことで、アイデンティティ形成が意識的になり、不安を客観視することにつながり、情報化社会にあっても、制限された不安とともに生きていけるのではないかと思う。

ローザは古典的近代のアイデンティティ形成について、個人が行き着く先をこう述べている。

> 諸個人が強く結びつけられている社会環境の準則に従って進行し、それゆえしばしば典型的な「アイデンティティ群」へと到達した。この群（クラスター）にあっては特有の職業訓練、職業従事、生活形態、政治志向などが互いに密接に結びついており、アイデンティティの〈構成要素〉を自由に組み合わせることは、ほとんど許されていなかった。

現在、急速な情報化などにより、アイデンティティの構成要素の組み合わせ方の自由度が増している。つまりローザが示す群ではなく、より強く個人に焦点を当てなければならないということである。

これからの「公共」は個人個人が違うのであるから、今まで以上にコミュニケーションをとっていかなければならない。そして、他の人のアイデンティティを守る必要も増してくる。こうなるともはや際立ってくるのは個人個人の「違い」だけであり、障がいを個性とすら意識しなくともよいかもしれない。また、変化が早く適応していかなければならないからこそ、人生のいつどこからでも自己実現へと向かうことができる道が開かれる。

この私が生きていく公共とは、つまりアイデンティティを意識した私が作り出した空間であり、その集合体が大きな公共として私にまた影響することになるだろうが、その際にはよき「公共の住人」として、この公共を形成する一部となりたい。

あとがき

私が 4 年の時を過ごした、みんなの大学校は「ケア」と「コミュニケーション」に重きを置き、大切にしている学校である。今現在、いかにそれらが私に必要なものであったかがわかる。

本論文を書くにあたり、「『障がい』という現実に対する」とあるように自分と向き合わなければならなかった。それは時に「辛さ」、「くやしさ」などをもう一度たどることでもあった。それでも、論文を書くという作業は客観性が求められる。その主観と客観の間を行ったり来たりをすることとなったが、確実に私を安定へと向かわせた。

もともとの生きづらさ、引きこもり、障がい、これらは存在を無くすことも、時間を戻すこともできない。ただそこにあるものとして前に進むことが唯一の道だと考えられるようになるまでには多くの人の助けがあった。

ここでは、みんなの大学校の学長である引地達也先生に感謝を申し上げたい。論文を書く間、粘り強くご指導、支えていただいた。そして、私を信じて下さったことは本当にうれしく思う。障がいを持ち、自分で自分を疑うことがある。その私にとって「信じる」ということが、どれだけ大きな力を生むか知れない。もう一度、感謝の言葉とともに結びとしたい。

引用文献

上島国利・上別府圭子・平島奈津子編（2007）『知っておきたい精神医学の基礎知識〔第 2 版〕－サイコロジストとメディカルスタッフのために』誠信書房.
見坊豪紀編（1987）『三省堂国語辞典第三版（中型版）』三省堂.
斎藤貴男（2016）『機会不平等』岩波書店.
田中拓道(2020)『リベラルとは何か　17 世紀の自由主義から現代日本まで』中央公論新社.
ハルトムート・ローザ（2022）『加速する社会　近代における時間構造の変容』福村出版.
松岡亮二（2019）『教育格差―階層・地域・学歴』筑摩書房.
水越真哉（2021）「社会との接点へ向けて－障がい者からの発信－」みんなの大学校基礎課程修了論文.
山脇直司（2004）『公共哲学とは何か』筑摩書房.
Daniel C.Dennett/Deb Roy（2015）「透明化が社会に強いる進化」『別冊日経サイエンス 249 科学がとらえた格差と分断　持続可能な社会への処方箋』（2021）.

フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』、「グッド・ウィル・ハンティング/旅立ち」（ https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%A6%E3%82%A3%E3%83%AB%E3%83%BB%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%B3%E3%82%B0/%E6%97%85%E7%AB%8B%E3%81%A1）（閲覧 2022 年 9 月 26 日）.

エンタミート編集部（2021）、「千と千尋の神隠し」に隠された謎とメッセージを徹底考察（https://dream.jp/entmeet/article/615faaa92fd07408342a15f6/）.

「子育てカウンセリング　リソースポート」映画・アニメから学ぶ（2018）、「カオナシ」について考える 3（
https://www.resource-port.net/2018/04/13/%E3%82%AB%E3%82%AA%E3%83%8A%E3%82%B7-%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6%E8%80%83%E3%81%88%E3%82%8B-%EF%BC%93/）.

日本図書館協会「図書館について」（https://www.jla.or.jp/library/tabid/69/Default.aspx）（閲覧 2022/10/29）.
日本図書館協会「ユネスコ公共図書館宣言　１９９４年」（https://www.jla.or.jp/ibrary/gudeline/tabid/237/Default.aspx）（閲覧 2022/10/29）.